

大西脳神経外科病院だより 第45号

ぶれいん

発行日：令和5年1月吉日

発行：学術図書委員会

発行責任者：大西 英之

編集責任者：吉野 孝広

今 何をどうするべきか

医療法人社団英明会 大西脳神経外科病院

理事長 大西 英之



あけましておめでとうございます。

COVID-19が発生して3年、混とんとして先行きの見えない世界が続いています。新年を迎えてもまだまだこの状況は変わりなく皆さんには日々頑張ってもらっており感謝しています。そのような中テレワークをはじめ感染拡大を防ぐ意味においてICT (Information and Communication Technology) の重要性は明確となってきています。その反面You TubeなどのSNSはいとも簡単にお金が稼げる仕組みが成り立つことや、人との繋がりが希薄になっていくという状況を生んでおりICTの発展がすべてにおいてよい影響をもたらしているとはいいがたいのも事実です。現場で汗水流して働いていた時代から、良くも悪くも仕事やお金に対する価値観が大きく変わってきているようにも感じます。働くことの喜びや苦勞して得たお金の有難み、感謝の気持ちを持つことが少なくなりこのままで良いのかと不安になります。

朝礼での講話、大西理事長の真意を考えてみましょう。

またICTの発展による情報格差は「デジタル・デバイド」とも呼ばれ、「国際間」「地域間」「個人・集団間」などの場面で不利益を被ることが問題視されており、これらは貧富格差に繋がっていきます。今後これは更に大きくなると思われ、非常に危険な状態だと言えます。かといってICTの流れを止めることは経済的視点からも良いとは言えません。しかし一流大学を出ても一歩間違えれば途端に契約職員として扱われるような仕組みや、一部の者だけが得をする世の中となっていることは嘆かわしいことです。



今、なぜこのような話をするかといいますと、このような世の中でいったいどうしていけばよいのかを皆さんにもう一度考えていただきたいと思うのです。皆さんは今、大変な状況の中患者さんのために日々危険な環境も顧みず業務に当たられています。これは非常に貴重な経験でもあり医療従事者として、大切な仕事だと言えます。しかし、ふとした瞬間に楽をしたい、辞めたいといった弱音を吐くのも当然です。そんな時に我々は医療従事者として誇りをもって日々の業務を粛々とこなしていけば、その将来はどのような世の中でも力強く生きることができるということを改めて意

識して頂きたいのです。ここが一番重要で、インターネットを利用した産業でいとも簡単に得られた富は一時的に裕福な生活や楽しいことがあったとしてもそれは長続きしないはずで、働くことによって得られる知識や経験そして喜びは何物にも代え難い、生きていく力だと思えます。そこを考えながら真摯に働いていけば、おのずと答えは出てくると思えます。まだまだ大変な状況は続きます。皆さんの協力がなければ乗り切れることは難しくなります。当院を中心としたこの地域の脳卒中救急医療を絶やさないためにも一致団結していけば新しい希望の一年になると確信しています。

「危機管理から健康管理」

Ohnishi Neurological Center

大西脳神経外科病院 院長

久我純弘



今、ブレイン新年号の原稿を書いている12月下旬は新型コロナウイルス感染流行期の第8波真っ只中です。当初は2~3年で終息するかと思われたパンデミックは、異常に早いワクチンの開発で接種が進みすでに5回目の接種を済ませている人も多い中、発生から3年が経過した今も未

だ終息は見通せない状況で、当院の新型コロナウイルス感染対応病床も空きがありません。

世界中で行動制限が緩和される中、はたして今年は収束の兆しがみられるのでしょうか。それとも新しい変異株の出現でまたまた振り回されるのでしょうか。

人類の歴史は感染症との闘いでもありました。これまでに何回ものパンデミックを経験してきました。現在、癌や成人病などが大きなテーマになっていますが医療において感染症は今でも常に大きな問題です。近年では原因微生物の同定や治療薬の開発、公衆衛生の進歩などでかなり克服されてきました。しかし今回は世の中のグローバル化、高速化もあり、治療法の確立されていない新たなウイルスによる感染がパンデミックとなりました。

ウイルスといえば生物ではないもののコンピュータウイルスも大きな問題です。以前から取りざたされてはいましたが、いくつかの病院がランサムウェアというウイルスにより病院機能が停止すると事件が公表されました。

様々なウイルスに負けない体と システムの構築が重要

システムを守るため様々な防御がなされていますが、それでも個々の端末から感染するリスクが常にあります。ネットワークは現在の病院、社会システムにおいてなくてはならないものとなり、LEDが普及した現代、ロウソクの時代に戻ることは考えられません。メール、Webから個人が感染しそれが病院システムに侵入するリスクが非常に心配です。



病院をはじめ世の中には様々なルール、マニュアルがありますが、それを守るのは個人です。特に病院という組織では患者さんと接してお互いの信頼のもとに診療を行っていくわけで個々の人が非常に重要です。当たり前かもしれませんが、人が病院にとって最も大事な財産です。働き方改革が叫ばれる中、ひとり一人の健康の維持と滞りない業務の遂行を図らなければいけません。必要な人員、適切な人の配置と効率化が今後も課題です。病気で休む人がなく、前に走り続けるためにジョグでもいいから皆さん走りましょう。

今年も神戸マラソン頑張ろう!

駅前クリニック 7年目の抱負

新年明けましておめでとうございます。

時間の長さは変わらないはずなのに、1年の経過を早く感じるようになりました。昨年もコロナ第6波に始まり、第8波が押し寄せる中で暮れましたが、丸3年を経過しても、このパンデミックは収束の兆しが見えてきません。今やウイルスが世界を席卷しているかのような脅威への予防策としてのワクチン接種率も高いとはいえ、再び医療体制の逼迫が言われ始めていても、感染者の増加に対して緊迫感が薄れている様にも感じられます。クリニックでも昨年後半から発熱外来を開設し抗原キットで検査していますが、数は少ないもののその多くが陽性者で特に若い人の感染が目立っています。



明石駅前大西脳神経外科クリニック 院長 埜本 勝司

昨年の患者数も低迷状態で、あの手この手の宣伝にも期待したほどの集患は実現できず苦しい経営状態が続いています。個々の努力だけでは解決できない問題もあると思われませんが、クリニックの役割は本院との緊密な連携の元に誠意を尽くして診療に当たり、一人一人の患者さんに頼りにされる診療所にしていく事で、それ以外に奇策は無いと思っています。

これまで専用の光ケーブルを通じて、本院で毎朝行われている症例検討会や、毎月の朝礼で理事長の話を視聴出来ていますが、私には脳腫瘍手術における術中の迅速病理診断の役割があり、手術をリアルタイムで観察しながら臨床検査部の平山さんや細江さん、柏原さんが作ってくれた凍結標本を診断して結果を術者や主治医に届けています。この病理所見をカンファレンスの際に医務部の先生方にも観てもらえるように昨年末IT室が簡便なシステムを構築してくれました。今年から運用を開始しますが、今後は双方向の会話も可能になると思います。

昨秋、神戸元町にある世界的な甲状腺専門の『隈病院開院90周年記念式典』に招待を受けて講演会に参加しました。極めて感動的な会でしたが、それは90年という長い期間、開設当時の理念を歴代の関係者がそれぞれの立場で貫き、ぶれることなく世界レベルの診療や研究を脈々と行っていることでした。

大西英之理事長の年頭の挨拶にもありましたが、こうした先人の医療への取り組みを見習って、大西脳神経外科病院が脳卒中を中心とした専門病院として全国から患者さんが集まるような施設にしていくためには、個々の更なる診療努力と科学的な志向に加えて職員全ての団結力が求められると思います。クリニックスタッフ一同、大西脳神経外科病院の一員であるという誇りと責任を忘れずに頑張っていきたいと思っています。

本年もどうぞ宜しくお願いいたします。



「慣れの恐ろしさ」

-今が成長の機会と考えて-

副院長 大西 宏之



新年明けましておめでとうございます。

未だコロナ終息の目処が立たず、とうとうコロナ禍4回目の新年を迎えることとなりました。昨年も大きな事故はなかったものの、最後まで本当にコロナに振り回された一年でありました。思いのほかコロナによる閉塞感や重症感はい前のほどではなかったようですが、その一因としてやはり「コロナ慣れ」による影響が大きいように感じています。以前には苦痛に感じていたマスク生活も今ではマスクが生活必需品となり、たとえコロナ陽性者が周りにいても動揺しなくなりました。また職場においても、歓迎会や忘年会などが無い職場環境が当たり前になっています。学会活動も、今では現地開催だけでなくWebも合わせたハイブリッド開催が通常となり、Zoomを用いた発表にも違和感を感じなくなっています。これほどまでにコロナで生活が一変したにも関わらずいつしかそれが当たり前になってしまう、本当に「慣れ」というものの恐ろしさを実感させられています。

人間、慣れを感じるまでは新しい変化や取組みに対して何をどうしたらいいのか分からず、一定の時間と労力が必要です。しかし、実際に新しい状況に慣れて、ルーティーン化できるようになるととても楽になる。これは一見いいことのようにも思えますが、人としての成長という視点で考えたときに、慣れというのは人間の成長を阻害する非常に恐ろしいものであります。慣れを感じるまでは、同じことを繰り返してもいい。しかし、慣れを感じ始めたら同じことは繰り返さず、新たな取組みを始めること。そうすれば、常に

成長し続けることができると思います。しかしながら、人間というのは弱いもので、慣れというものについつい甘えてしまいがちです。ちなみに私もそのうちの一人ですが慣れに甘えないためにも、あえて厳しい環境に身を置くように心がけ、行動に移すしか解決方法はないかもしれません。それが結果的に自身の成長につながると思います。この度のコロナ禍では急激な変化で苦勞することも多くありましたが、慣れというものの恐ろしさ、成長することの大切さを再認識する機会となったことはいいきっかけだったのかもしれない。ピンチはチャンス、職員皆様、ポストコロナに向けての新たなチャレンジを新年の目標としてもらえれば幸いです。



論語と算盤と医療

先日自宅の本棚を整理していて、大河ドラマ放送中に衝動買いしてあった「論語と算盤」が発掘され、しばらく読み込んでいた。ご存じ、近代日本の設計者の一人である渋沢栄一氏が明治維新後の社会構造大変革期における実業や資本主義の在り方を説いた講演口述集である。それまでの価値基準が通用しない大激動期に新たに走り始めた社会経済活動において、法整備も不十分なある種の暴走状態を渋沢氏がいかにコントロールしようとしたか、皆に行動規範を訴えようとしていたか、という観点で読み始めたが、ページが進むにつれ現在から未来に及ぶ社会全体への示唆教訓に思え、名著とされるのも腑に落ちた。

多くの人が幸せになるための教えとは

「己れの欲せざる所は人に施すこと勿かれ」、「道を以てせざれば之を得るとも処らざるなり」、「仁に志せば悪しき事なし」など我々が子供の頃からいろいろな人から教えられた馴染みある教訓が続き、読んでいても違和感を感じない。2500年前に孔子が説いた内容がすべて当てはまるわけではないが、大部分がこのグローバル化が進んだ現代社会においてもいろいろ修正、解釈され適応され続けていることは、やはり多くの人が幸せになるための重要な教えなのであろう。2030年までに世界中の人が達成すべき内容をかみ砕いたものが17項目のSDGsであるが、単に「貧困をなくそう」、「働き甲斐も経済成長も」といっても、このような土台になるさまざまな思想行動規範がなければ机上の空論でしかなく、2030年はおろかそれ以降でも達成、持続するとはとても思えない。

さて、これまである程度の人生経験を積み、いろいろな人に教養育てられてきた自分の過去、現在、未来においてはどうかであろうか。一社会人、一医療者として、目の前の患者さんはもとより、関わる様々な人々に安心、幸福を届けるべく、これからも努力、創意工夫は続けてゆかなければならない。それなりに努力は怠っていないつもりであるが、実際に他人を幸せにできているであろうか、道徳を備えた言動ができているであろうか。反省は尽きない。



脊椎・脊髄センター センター長 **山本 慎司**

150年前の明治維新の頃と現在の社会の変わり方が異なるが、爆発的な技術革新により30年後にはバイオプリンティングによる再生ヒト臓器の市場提供、シンギュラリティー到達による人工知能のヒト社会の管理、汎用ヒト型ロボットの一般普及、宇宙エレベーター建設開始など、アニメやSF映画で見ていた内容の現実化がかなりの可能性で見込まれているそうです。COVID-19パンデミックにて内向閉塞的となり日々の実感としては少ないものの、確実に社会は想像を絶するスピードで変わり続けています。

医療の本来の目的は、**すべての人の幸福を追求する** ことにある。これを機に今一つ、現在未来においても自分自身の基軸となる行動規範を見直してみたい。

医療に従事できる喜びと誇り

事務部 部長 **藤井 健**

2022年秋、身近な方が一刻を争う状態で当院に緊急入院し、手術で一命を取り留められました。先日、退院後診察に来られたその患者さんと玄関でばったりお会いしました。ご入院中はベッドの上でのお姿しか見ていなかったため、歩かれています様子を見て安堵しました。その方は大きな病気も入院も初めてのことだったようで、数ヶ月に亘る入院中に、恐らく人生で初めて立ち止まって色々なことを考えたとおっしゃっていました。

組織の責任ある立場の方であり、お仕事のこともさぞ気になられたことと思いますし、ご自身の健康についてもこれまで顧みられる機会は無かったようで、健康の大切さなど入院して分かったことがあるとしみじみ語られる言葉が印象に残っています。ご入院中も退院されて再会した際にも、その方は当院の医師、看護師、リハビリスタッフ等々、職員の献身的な仕事振りと親切な対応に感心され、「命を助けてもらった」との感謝のおことばを戴いています。当院の医療と職員を高く評価いただけることを嬉しく思うと共に、命に関わる責任と誇りを改めて実感する出来事でした。

医療職の皆さんには日々の出来事であっても、患者さん、そのご家族にとっては人生で初めての、大きな転換点になるかもしれない出来事に関わる責任は極めて重いものです。重い分だけやり甲斐は大きく、達成感は何物にも替え難いものでしょう。当院で医療という仕事に関わることができる喜びと誇りを胸に、新しい年も歩みを進めて参りましょう。



医療従事者の言葉 —医療接遇の本質—

医療技術部 部長 **吉野 孝広**



私は18歳の時に交通事故で2年半の闘病生活を余儀なくされました。まともに動かない左足に自暴自棄となり精神的重圧から大学も中退。松葉杖での入院生活は気力もなく漫然と過ごす日々でした。そんな時、当時入院していた病院の院長先生から「思うようにならんとは苦しかろうばってん、吉野君な、こんままでよかとね」（熊本弁で「苦しいだろうけど、吉野君はこのままでいいのかい」と声をかけて頂きました。



そして「今の経験を生かしてみらんね」と渡されたのが理学療法士養成校のパンフレットでした。改めて当時を思い出し医療従事者からかけられる言葉の重みと人を思いやる心の大切さを実感します。このままではいけない、上を向かなくてはという思いが生まれた瞬間でした。

医療従事者が患者さんやご家族に掛ける言葉には大きな力があると思います。科学的にもそれは実証されており病態に影響を及ぼすと言われています。もちろんプラス面だけでなくマイナスの影響もあります。

自分が掛けるその言葉や行動そのものが医療または治療行為であり、それが患者さんやご家族の精神的安定をもたらす医療従事者の行う接遇の本質であると言う事を肝に銘じておかななくてはなりません。私たちはプロフェッショナルです。どんなに忙しく大変な状況でも自分の職業にプライドを持ち、自問自答を繰り返し医療行為である接遇が実践できればと思います。新年を迎え我々の言葉が良薬であるためにも私も含め当院すべての職員が心掛けていかななくてはならない事だと改めて感じています。 本年もどうぞよろしくお願い致します。

「癸卯」

看護部 部長 前田 ゆうこ

今年は「うさぎ年」です。十干十二支で読む2023年は「癸卯（みずのとう）」にあたる年とのこと。「癸」は、順序で言えば最後にあたり、一つの物事が収まり次の物事への移行をしていく段階。また、「卯」（うさぎ）は「茂」という時期であり、繁殖する、増えるという段階にあるのだそう。その両方を備えた「癸卯」は、昨年までの様々なことに区切りが付き、次に向かう、成長や増殖といった明るい世界が広がっていくと解釈できると記してありました。

うさぎのように、飛躍する年になりますようにと願う思いもありますが、前述した明るい世界という穏やかな年になりますようにと願うばかりです。新型コロナウイルスによる感染が始まってから3度目の冬も、現場はとても緊張感の高い状況が続いています。昨年の第7波では、約3割の職員が感染し災害と言える状況を経験しました。今は第8波に突入し、潜伏期間や感染経路が不明で、どこから感染者が発生するのかわからない状況にあります。まだまだ終息が見えない状況での年明けとなりましたが、看護を見失わないよう尽力していきたいと思えます。





また、2030年の「超高齢化社会」や2024年の医師の働き方改革における「タスクシフト/シェア」などの社会情勢や政策に応じて、具体的な対応策を検討していく年になると思います。超急性期医療だけでなく、地域との連携も求められています。地域の住民や入院している患者さんのニーズは何であるのかを常に考え、チーム医療・看護を提供できるよう努めていきたいと思っています。

「信頼を大切に」

10年ほど前にテレビ番組で古い外国の銃になぜか「MADE IN JAPAN」の刻印が刻まれているところを見たことがあります。日本のものではないことは明らかでしたが日本製と詠うと「売れる」からということでした。私が生まれた1960年は「もはや戦後ではない」と言われた年で、敗戦でボロボロになった国がようやく活気を取りもどした頃ですが、それから20年を待たず家電や電子部品、自動車や二輪車で日本は世界の市場を席捲していきました。

日本製品は何より品質において外国製品を圧倒しその憧れが見知らぬ銃にまで「JAPAN」を刻むことになったのでしょう。

しかし最近は日本の工業製品でも品質管理の不正や工程の手抜きなどが報じられるようになってきました。それぞれ事情もあるのですが先人の作り上げてきた伝統と信頼を



薬剤部 部長 田中 一穂

目先の判断で瓦解させてしまうことは誠に残念でなりません。薬の業界でも同様の不正により操業停止に追い込まれる事例が次々発覚し且つてない薬不足の状態が続いています。突然、馴染みのある薬の供給が中断することもあり患者様や先生方、職員の皆様にも何度もご迷惑をおかけしております。一方でサッカーワールドカップや様々な国際試合の観覧席では日本人がきれいに掃除をして帰る姿が幾度となく報じられ同胞として誇らしく誠に嬉しい限りです。新年を迎えるにあたり「信頼」を大切に、何か良いニュースをお伝えできるようなそんな1年に出来ればと願っております。



2022年 院内研修発表会 理事長賞

「下肢MEPの新たな振幅増幅法の検討」

臨床検査科 臨床検査技士 池田 紘二

山本先生と研究を始めて、6年が経ちました。2016年から始めた下肢MEP（術中モニタリング）についてこれまで、頭部刺激位置の検討、導出不良症例の原因の検討など、様々な視点で研究を重ねてきました。今回は、下肢MEPを導出するための新たな刺激条件の検討を行い、下肢導出に適した刺激法を見つけることができました。これにより、術中モニタリングを行う際の下肢MEPの導出率が上がり、患者の術後麻痺予防に役立つと考えています。

何より大事だと思うのは、自分達が行ってきた研究や取り組みが、これから患者様の治療や健康につながっていく、つなげていくことだと思います。院内研究発表だけでは、当院の患者様だけにとどまってしまうかもしれませんが、もう少し

研究を進めて、学会発表・論文作成までつなげていくことで、日本中、いえ大袈裟かもしれませんが世界中の患者様のお役にたつならばと思っています。最後になりましたが、研究にご協力いただいた、患者様、山本先生、麻酔科の先生、手術室、検査科のスタッフに心より感謝を申し上げます。今後ともよろしくお願いたします。



研究の成果は
これから医療に
繋げていくこと
それが何より大事

院長賞



南3階病棟

「脳卒中急性期における運動失調スケールの作成」

-検者間信頼性の立証- が受賞されました。



編集後記

あけましておめでとうございます。まだまだ大変な状況は続きそうですが、目の前のことを粛々としていくしかないのかなと、半ばあきらめの気持ちもありながら編集後記を書いています。今回のぶれいんは新年のあいさつとして理

事長をはじめ原稿を頂きました。毎年の恒例とはいえお忙しい中原稿を書いていたいただき、写真も撮らせていただき、快くご協力いただき感謝しております。職員の皆さんも「ぶれいん」を今年もよろしくお願申し上げます。

